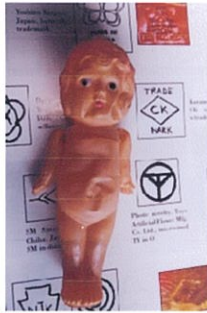


セルロイド人形・パープー(4/4)



▼業務並業主  
輸出、内地、セルロイド玩具雜貨製造販賣

▲工場並住宅位置  
明治三十二年十二月生

田島保次

工場 東京府下 吾嬭町請地一二六九  
住宅 同上

▼業主履歴

業主田島氏は群馬縣新田郡世良田村の出身にして大正七年市内向島に於て經營せる田島明治氏の兩全商會に入り、具さに研鑽の苦を嘗め斯業の全部に亘り修得に力む。斯くて約八ヶ年の雌伏時代を經、大正十五年三月獨力を以て現住地に工場を興し、直に業務開始をなすに至れり。

氏が群を絶する奮勵努力は創業幾干ならずして忽ち斯界に擡頭し幾多の先輩を凌駕し生産力の大を爲すに至る。年齒壯にして春秋極めて豊かなるの氏が前途こそ尤も曠目に値すべきものあらむ

本年3月、パープーの新人  
一人が、セルロイドハウス  
に入館いたしました。  
そこで書庫の本を開いて、  
パープーの背中のロゴマー  
クを突き合わせたところ、  
立川さんのものと判断して、

お宅に電話をかけようかと思つてしまいま  
した。

しかし、マークを再確認したところ、この  
パープーは田島保次さんの作品であること  
が分りました。立川さんと田島さんのロゴマ  
ークがよく似ています。

田島様からはピンポンの金型をいただい  
ており、感謝いたしております。セルロイド  
ハウス図書室在庫「日本セルロイド商工大観」

に載っている田島様に関する記事をご紹介します。





図書室には、セルロイドに関する英文の文献も揃っています。それらの書物の中の明治工業史や大日本化学工業、日本セルロイド商工大観には、セルロイド玩具の先駆者・長峰清次郎や葛飾セルロイド工場の創設者・千草稔等を始めとしてセルロイド業界先達の方々の出生、職歴などが明細に記してあります。大日本セルロイド株式会社50年史には「明治23年(1890)、大阪の千草稔、大阪衛生試験所技師馬屋原基とセルロイド生地製造に着手、のち廃業」とあります。

\*\*\*\*\*

葛飾区立渋江公園内を散策しました。ここの土地が「大正3年・千草稔が創設したセルロイド工場の跡地」という実感がしました。

写真撮影日時(左上)平成27年3月5日午後1時

花壇を間もなく造成予定。

(左下)平成23年7月8日午後2時。



#### 葛飾区セルロイド工業 発祥記念碑

大正三年四月わがセルロイド工業界の先覚故千草稔氏がこの地に初めて玩具工場を設けてより三十有余年 斬業は幾多の優秀な後継者達の努力によって日に月に発展し 今や関係業者数万を超え その生産額はわが国輸出総額の過半数を占める繁栄を示し 実に葛飾工業地区の中心となるに至った 昭和二十六年秋 渋江公園が千草氏創業の由緒深いこの地域に開設せられるに当り この事業の発展を希う地元有志相はかつてセルロイド工業発祥の地にふさわしい平和と希望とを象つた記念児童群像を長沼孝三氏に委嘱し 公園に美しい風景を添えると共に遥かに先人の遺業をしのぶよすがとした

昭和二十七年十一月二十三日

東京都葛飾区セルロイド記念碑記念碑 建設会有志

\*長沼孝三は彫刻家・山形県長井市名誉市民・昭和6年東京美術学校卒業\*

記念碑は公園の中ほどにあります。公園面積は16,421㎡、園内にはテニスコート、ゲートボール、子供の砂山・遊技台、素足で散策できる芝生、などがあります。

記念碑にそえて、千草稔の銅像があればよいのだが、と思いましたが、それが出来なかったのは、千草稔の写真が無かったからでしょう。当時の工場敷地の図面だけが葛飾区役所に保管してあります。

この公園内のテニスコート脇に、数年後に建てられた「葛飾区・染色業者の胸像」を見るたびに「千草稔の銅像があればよいのに」と考えてしまうのです。





千草稔が上記の土地にセルロイド工場を創ったのは今から100年前の大正3年4月1日、当時の地名は、東京府・南葛飾郡本田渋江村でした。

大正1年に京成電鉄の四つ木駅が開設されましたが、本田渋江村は、小さな川、水田、堰、釣り人が多く、田にきれいな水をひいてシジミを養殖していたような所で東京市墨田区と綾瀬川を堺にした東京の郊外でした。

明治43年に荒川・墨田川が氾濫し東京が大洪水。それを機に内務省は綾瀬川に並行した荒川放水路の建設を計画し、大正3年に東京北区岩淵から下流の南葛飾郡方面に向かって着工し、大正9年に第1次工事が終了。荒川放水路は本田渋江村に大きな影響を及ぼしました。（国土省荒川博物館、木根川橋、四つ木橋を歩いた時の写真など別稿とします）

\*\*\*\*\*

千草セルロイド工場が始まった大正3年の7月に、第1次世界大戦が勃発しました。すると間もなく千草工場に「セルロイド製キューピー人形」の注文が入りました。

当時、キューピーの考案者ローズ・オニールは、アメリカからドイツに行ってキューピーを製造していました。キューピーの材料は、最初の頃はビスク（陶器を素焼きしたもの）でした。が、やがてセルロイドに変わりました。

第1次世界大戦の当事者となったドイツは、キューピー人形どころではなくなりました。

それに代って千草工場が、オニール財団からキューピーの一手製造権を取得したのでした。千草工場で作ったキューピーは日本国内でも販売されるようになりました。

経営力が備わった千草セルロイド工場に、アメリカから新しい「セルロイド人形の製造」依頼がありました。

それは「パープー」というイラストの絵を、セルロイド生地を使って立体化し、商品にして欲しいという注文でした。

セルロイドの人形造りは、先ず金型からです。金型師には美術工芸調金師だった上條是美がおりました。上條はセルロイドの彫刻を千草工場も含めて一番多く取り扱った人



でした。型業界きっての徳望家でした。彼の5代目が、現在のモールドメーカー株式会社カミジョウ社長の上條真徳氏です。

それから、人形製作の最終工程で最も大切なのは彩色です。パープーは、頭髪が金髪と赤髪との二種類が作られました。学用品や家庭用品などのセルロイド製品は、生地そのものに色模様がついています。が、セルロイド玩具・人形は無地ですから、目、鼻、頭髪などの彩色が必要です。彩色にはセルロイド用の塗料が使用されました。

**\* 千種稔は明治23年、資本金五千円を投じて大阪福島村（梅田駐車場の付近）に工場を建設し、セルロイド生地の製造に着手、失敗。しかし、その過程でセルロイド塗料の製造と使用方法を生み出しました。彼はセルロイド玩具人形が主力産業の東京に来て塗料で大きな資金を稼ぎました \***

第一次世界大戦が終わり、世界中が不況になりました。大正8年までに、東京の千種セルロイド、ローヤルセルロイド、一条セルロイド、奉セルロイド、十全セルロイドが合併して、中央セルロイド株式会社となることが決定しました。大正7年3月、千草稔は引退を宣言し一切の事業から、あっさりと手をひいてしまいました。

（その進退の鮮やかさは、名将の軍を駆るにも似て真に水際立っていた）と雑誌に書かれました。

パープー等の製造は、千草工場で技術を修得して独立した小林大八工場などのセルロイド加工業者に引き継がれました。キューピーはオリエンタル・トイさんが新型の金型を作りアメリカ型のキューピーを駆逐しました。

\*\*\*\*\*

日本のセルロイド人形玩具の対外輸出が、大正末年から昭和10年にかけて隆盛でした。この件について数字による説明が「セルロイド研究調査報告書・平井東幸」に書いてありますのでお読みいただければ幸甚です。

この時代のセルロイドの生産体系は一様ではありませんでした。例えば、渋谷公園記念碑に「セルロイド業関係者数万」とあります。また、セルロイドハウス横浜館の彩色業者の名簿には40名が載っています。が、実際の数字は下請・内職1万人以上です。（彩色業者はセルロイド産業の中で独立した形態になっていました）成形工は2千人（現在は平井英一さん唯一人）も、いたようでした。



そしてセルロイド玩具人形の完成品の殆どが、東京・蔵前の岩田屋・倉持商店および増田屋・斉藤商店に納品されたのです。元々発注元が倉持商店や斉藤商店です。両店は江戸時代から御蔵の前に居を構えた御用商人だったのです。といっても、セルロイド工場から倉持商店や増田商店にストレートで納品されるわけではありません。中間業者がいるのです。セルロイド生地を買うのも問屋から代理店を通じます。

このセルロイド加工産業の経営形態を分散型経営と称します。それに関する本を数年前に、東大・谷本雅之教授が東大出版会から出しました。教授が大正末から昭和10年までのセルロイド産業を研究されております。定価6千円ですが、大変参考になります。

\*\*\*\*\*

日本が連合軍の占領下（昭和20～27年）にあった時代、輸出品に Made In Japan の刻印をしなければなりません。そのときパープーは、写真のような「カーニバル」スタイルに変わりました。

と、申しましてもこの写真は、日本のものではありません。ラウエルさんの本

「Celluloid Toys」

の227頁を写したものです。

Made In Japan 東京・岩井英夫産業の製作、と書いてあります。値段も書いてあります。

日本ではパープーを輸出用にだけ製作したので、写真のような現物を見つけることが困難です。ただ、1頁の写真のパープーは、着せ替え用ですので骨董市などで見かけることがあります。



Referred to as "carnival dolls" because they were won as prizes from the game booths that lined the midway at fairs and carnivals. These dolls are usually half naked except for the application of glitter, ribbon and feathers. They frequently held canes and wore top hats, earrings, and necklaces of glass beads. These dolls came in a variety of sizes ranging from 6" to 12" and were manufactured by a number of companies in Japan as "Papoose Dolls." 8" doll w/glitter and feathers, top hat and cane, gold shoes marked on back Made in Japan. Hideo Iwai Sangyo, Tokyo Japan, \$30.00. 12" doll w/pink and white feathers, silver top hat, earrings and bracelet, red shoes w/white socks. Intertwined COH, Made in Japan. \$45.00 - \$50.00.



ケース・ラウエルさんは、平成12年のセルロイド産業文化研究会で基調講演をして下さいました。セルロイドハウス横浜館にも来ていただきました。



(了)  
H2・3・24